「石像が……あった」――発見

三月二十八日、桜井弥六の銅像を確認するために※3福島県須賀川市を訪ねた。「遠かった」市内に入ったのは三時過ぎであった。

さて銅像を捜そうと思ったが須賀川のどこに銅像があるのかかいもくわからない。交番に尋ねてみると、銅像らしきものが公立岩瀬病院にあるようだという。道順を聞き病院へ行ってみた。そして、病院に着いた。

銅像は……あった。私は思わず震えた。碑文を確めた。「まちがいない」たしかに桜井弥六だ、岩修さんの言ったことは真実であった。――――」

さっそく碑文を書き写したが碑文には※4「中蒲原郡曽ノ木村金巻に生まれ……」とある。これは西蒲原郡黒埼村のまちがいであろうと察った。だが、像は銅像でなくて石像であった。この理由はわからなかった。わからないことはもう一つ、桜井弥六の業績である。碑文には詳しいことは書いてなかった。

もっと調べなければとは思ったが、夕方近くになっていた。日曜日のため市役所も休日である。やむなく帰途についた。

帰ってきてすぐに私は須賀川市役所の教育委員会に問い合せてみた。「なにぶん古いことなので即答はできないが調べてみましょう」という返事であった。私は子孫のことを調べようとしたがわからなかった。

四月の初め、とにかく岩修さんに報告しようと桜井家を訪ねた。私が写してきた石像の写真を見せ、町の広報で発表される予定というとたいへん喜ばれた。ただ、銅像のはずが石像であったことを不審に思ったようすだった。私は、「須賀川市からの連絡で詳しくわかりしだいまた来ます」といって桜井家を後にした。思えばこれが岩修さんとの別れになった。

その後、須賀川市から連絡はあることはあったのだが、詳細はわからなかった。

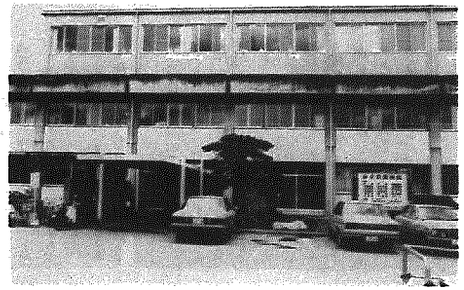
ただ、桜井弥六は明治、大正の政治家※5後藤新平と親交があったことが知れたが、五月に入るとやはりもう一度行って調べなければと思うようになった。

二回めの須賀川行きを計画していた矢先の五月三日。妻から桜井岩修さんが一日に亡くなられたことを聞いた。突然だった。あまりの驚きで声がでなかった。桜井岩修さんは黒埼町の町史がまとまるまで、どうしても生きていて欲しい人であった。

※3須賀川市の人口は五万八千人ぽたん園で有名。

※4現在の新潟市曽川、天野地区

※5一八五七～一九二九。明治大正の政治家で内、外務大臣東京市長などを歴任



◀公立岩瀬病院

◀須賀川市役所

須賀川での新しい生活――苦難

注　以降の記事は筆者が須賀川市へ調査に行き、桜井トメさんや郷土史家の武藤昌義さんから聞いた話を基にした。

当時越後から会津へ何らかの事情で流れ落ちる人は多かった。桜井親子もその不幸な人たちであった。会津から郡山へ、郡山から笹川（現安積町）を経て本屋敷（明治二十二年須賀川市に合併）にたどり着いた。

桜井親子はこの土地の車田定六という人のお世話になり、結局この地に定住することになった。金巻村を離れること約二百キロ。当時ならば五十里である。現在は国道49号線、6号線を通って車で四時間強の道のりだがこの時代は急所や難所の多い山道で難渋をきわめたであろう。

須賀川の町は、宿場町として栄えていた。多くの豪商や旧家が軒を並べ、町人や旅人でごった返していた。ここでの桜井親子の生活は楽なものではなく、日雇人夫やあめ売りをして生計をたてていた。かっては、苗字帯刀を許されていた桜井家ではあったが。

この時代のエピソードとして生まれつき美声の伝兵衛は、ある殿様にたびたび招かれて、自慢ののどを披露したということがあげられる。なお、伝兵衛のこの後の人生はわからない。

時代は明治へ 後藤新平が須賀川へ――出会い

明治五年、須賀川の町に県立須賀川病院が建てられ、医学校も併設された。この時、桜井弥六は三十四歳の働き盛りであった。

弥六は父親譲りの誠実さと人柄が認められ、病院と医学校の寄宿舎の賄（まかない）をすべて任せられた。病院南門に近い自宅で食事を調理し、毎日毎日病院へ運んだ。

医学校には、旧会津藩士族の子弟や平民の子供たちがぞくぞくと入校してきた。「公立岩瀬病院小史（昭和十六年刊行）」によれば「ここに病院ができるや、患者よりも医学修業を志望して遠く県外から、病院の門を叩く者が多かった」とある。

そんな生徒の中に後藤新平がいた。後藤は当時十六歳、岩手県（水沢藩）の出身で貧しい士族の子であった。入校はしたが、学費や寄宿費の支払いに困っていた。

弥六はそんな後藤をかわいがった。そして、卒業するまでの数年間学費や食事のめんどうをみた。弥六に世話をしてもらった生徒は多かったという。

後藤新平は弥六の見込んだとおりの人物であった。二十五歳にして名古屋の県立愛知病院の院長に就任した。政界に身を転じた後も医学畑を歩いたが、満州鉄道総裁、内務、外務大臣東京市長を歴任し、関東震災後は内務大臣兼帝都復興院総裁の要職を務め、大政治家となる。

一方、桜井弥六は一生を病院の賄夫として過すのである。が後藤との交友は互いに死ぬまで続いた。

一生を病院に尽くした弥六――人と人生

では、桜井弥六はどういう人であったのだろうか。私が調べたエピソードを三つ記してみる。

一、青木ハルという十八歳の娘が目の治療のため片道八キロの道を歩いて通院していた。弥六は、これをふびんに思い近くに住居を世話してやり、自分の賄の手伝いができるようにとりはからった。

二、ある日、ハルが目の痛みのため十日以上も仕事を休んだが、給料は一日も差し引かず渡した。（この二つは直接鈴木ハルさんに聞いた話である）

三、須賀川に昔遊閣があった。ここに新潟から何人か売られてきていた。弥六は彼女たちを更生させ、結婚の世話までした。

その他、数々の善行をしたというが、具体的には知ることができなかった。

昭和四年春、九十二歳の桜井弥六は病に倒れた。三十四歳で奉職して以来五十八年間が過ぎていた。この間、病院からたびたび表彰を受けていた。須賀川市の人たちも弥六の善人ぶりをよく知っていた。

そして、銅像を建てようという気運が盛り上った。建立には町の有力者が設立人となり、製作は三木宗策（当時、高村高太郎と並ぶ彫刻家であった）費用は千八百五十円という莫大なものであった。銅像は翌昭和五年春に完成した。しかし、桜井弥六はそれを見ることはできなかった。前年の十二月一日、ついに人生の幕を閉じたからである。葬儀には多くの市民が参列したという。

再び須賀川へ――疑問

五月七日(金)、再び須賀川へ向かった。今度は事前に市役所に連絡をとってあった。町長さんも嬉んで須賀川市の市長あてに紹介状を書いてくださった。

今回訪問の目的は――

一、桜井弥六が銅像を建てられた理由と業績について

二、銅像が石像に変わった事情

三、政治家後藤新平と弥六の間柄とそれを証明する写真など

四、弥六の子孫のかたにお逢いすること（お孫さんが同市に居住と市役所から連絡があった」―などである。

午前六時半妻とともに自宅を発った。

十一時近くに須賀川市役所に着いた。車のトリップメーターは百九十八キロとなっていた。

私たちはまず教育委員会を訪れた。教育長の橋本光男さん、川音正平社会教育課長、市史編さん室の村越幸司さんらにお会いし話を伺ったが明確な答は得られなかった。

その後、助役の高木博さんにお会いし市役所を後にした。教育委員会で紹介していただいた須賀川市の郷土史家武藤昌義さんの案内で公立岩瀬病院を訪れた。

病院の副管理者で前助役の岡崎長英さんは「銅像は戦争で供出されたのではないか」（二ページ右下写真）と言われた。さらに、供出される時撮ったと思われる写真も見せていただいた。そして、終戦後石像が建てられたのであろうとの話であったが詳細はわからない。

次に訪れたのは、現在の桜井家である。病院南門のすぐ近く石像からも十メートルは離れていないところに桜井宅はあった。

桜井弥六には子供がなく、私がお会いした桜井トメさんは直接血のつながりはないがお孫さんにあたられる。トメさんのお話はかなり詳しいものであった。そして、私は応接間に掲げられてある大きな額を見た。

四人の男が写った写真である。（2ページ左上）前列左のいすに座わっている人が桜井弥六、その隣りが当時内務か外務大臣であろう後藤新平である。後列二人は不明。

この写真の手札判をお借りし私たちは色々とお世話になったことを謝し桜井家を去った。

その後も武藤氏と討議したりして、ある程度私の疑問を解明し、須賀川市に別れを告げた。

◀教育委員会で橋本教育長らと会われる宮田さん。

◀病院で岡崎さん、武藤さんと話される宮田夫妻